

21 京都の茶湯

きょうとのちやのゆ

知る

■京都の茶湯

村田珠光(一四二三～一五〇二)が創始し、武野紹鷗(一五〇二～一五五五)が洗練し、千利休(一五二二～一九一)が大成した茶湯は、桃山時代から江戸時代初期にかけて大名や富商の嗜みとして大いに興隆しました。しかし、その流行と普及につれて茶湯の理念である「わび」の心が忘れられ、茶湯は単なる風流な趣味ないし遊芸へと変化していきます。

このような風潮に対する反省は、利休の孫にあたる千宗旦(一五七八～一六五八)のころからおこりつつあり、宗旦の息子達によって流派が成立するころには、茶湯は茶禅一味を實踐した「茶道」へと展開していきます。

■茶の伝来

日本での茶の飲用起源については明らかではありませんが、九世紀初頭に永忠ら中国(唐)へ留学した僧によって伝えられたと考えられています。当時の喫茶方法は、陸羽の「茶経」(八世紀中期成立)に記されているような唐風の団茶法と呼ばれるもので、蒸した茶葉をさまざまな形にして乾燥保存し、飲む時は必要量をほぐして、粗く粉末にしたものに塩や生姜を加えて釜で煎じました。

本格的な茶の栽培が始まるのは、鎌倉時代に明庵栄西(一

一四一～一二二五)が宋より抹茶の製法(摘採↓蒸製↓乾燥↓粉碎)を伝来してからであり、この茶種は右京区の梅尾を初めとして各地で栽培されるようになります。

■茶寄合の流行

南北朝時代になると茶の品質を当てる茶勝負(闘茶)の会、いわゆる茶寄合が盛んに催されるようになり、延暦寺の学僧玄慧法印(?～一三五〇)が記したとされる『喫茶往来』には、この茶寄合の座敷飾や現在建仁寺の茶会(四つ頭茶会)で行われているような茶札が記されています。

このような禅院の茶礼は、特に武家社会に受容され、それは書院造の発展にともない、唐物・唐絵などで座敷を飾り、唐物の器物を用いて点前作法を行う書院(殿中)茶湯へと展開します。



台子飾(彦根城博物館蔵)

ちなみに書院の茶湯では座敷に隣接する場所(茶湯所)で用意された茶を持ち運ぶか、台子(茶道具をおさめる四本柱の棚)を座敷に持ち込んで点茶をするかの二方法がとられました。

また、この頃には東寺をはじめとした社寺の門前などで参詣人相手の一服一銭の立売茶店も出現するようになります。

■市中の山居

十五世紀後半には、のちに茶祖と仰がれる村田珠光（一四二二〜一五〇二）が登場します。珠光は、唐物の持つ完全美よりも、国産品が持つ不完全さに美を求め、備前焼や信楽焼などの粗相な器を茶湯に取り入れました。

また、珠光は、一休宗純（一二九四〜一四八二）に参禅して体得した禅の精神をもって、茶禅融合を提唱し、座敷飾などを極力簡素化した質素な美を追求しました。

この美意識の変化は、室町幕府八代将軍足利義政（一四三六〜九〇）が建立した東求堂同仁齋（左京区銀閣寺町慈照寺内）のような書院の小型化や、書院に代わる草庵茶室の出現をもたらしましたが、その中心は富裕な町衆でした。

当時、彼らの間では、町の中に草庵を持つことを「市中の山居」と言い、特に京都においては、珠光の養子村田宗珠（生没年不詳）などの茶人達が「下京茶湯者」と呼ばれたように、公家や武家が住む上京ではなく、商工業者が密集する下京に閑居を求めました。

堺の茶人武野紹鷗（一五〇二〜五五）もまた四条室町に山居を構えた下京茶湯者であり、珠光の茶湯の特色をより一段と明確にした人物です。紹鷗は四畳半を基本とする草庵茶法をつくり、わび茶への志向をはっきりと打ち出します。

この後、茶湯は三好三人衆や松永久秀らの戦国大名に荷担されて発展の機運に向かっていくのですが、それをさらに推進したのは織田信長（一五三四〜八二）ついで豊臣秀吉（一五三六〜九八）です。

■千利休

武野紹鷗に師事した千宗易（利休、一五二二〜九一）は、

今井宗久・津田宗及らとともに信長・秀吉の茶頭となり、天下一の宗匠の名を得ました。天正十三（一五八五）年十月、宗易は利休の居士号を勅賜され秀吉が催した禁中の茶会に出席、同十五（一五八七）年十月一日の北野の大茶湯では、秀吉の呼びかけに応じ茶を点てています。

この利休の茶は継子千少庵や孫の宗旦に受け継がれ、千家の茶として発展する一方、利休七哲と呼ばれる大名達にも受け継がれました。ことに天正十九（一五九一）年春、利休が秀吉の命により自刃してからは古田織部（一五四四〜一六一五）やその弟子小堀遠州（一五七九〜一六四七）、遠州の後継者の片桐石州（一六〇五〜七三）らが次々と江戸幕府の將軍指南役となり、「大名茶」と呼ばれる系譜を確立します。

また、「樂家文書」によると、利休は信長茶頭時代より、朝鮮から渡来した阿米夜の子長次郎（？〜一五八九）を指導して好みの茶碗を制作しており、のちに聚楽の土で焼いたこの茶碗は、秀吉から「樂」の印が与えられ樂焼と呼ばれるようになります。

■堂上の茶

茶湯は、もともと公家社会とあまり縁がなく展開しましたが、秀吉のころから次第に公家社会にも浸透するようになり、堂上の茶と呼ばれるようになりました。

その傾向は、江戸初期、寛永文化の一環として一段と進みました。この傾向をさらに進めたのが、近衛応山（信尋、一五九九〜一六四九）・一条恵観（昭良、一六〇五〜七二）の寵顧をうけ、さらに後水尾上皇・東福門院からも信頼を受けた金森宗和（一五八四〜一六五六）です。

宗和の茶趣は、彼が指導して焼かせた野々村仁清（生没年

不詳)の色絵の陶器がよく示すように、わびを基調としつつも優雅な王朝古典趣味を漂わせたものでした。

■三千家の成立

利休の切腹後、千道安(利休の長男、一五四六〜一六〇七)・少庵ともに身柄を大名に預けられますが、数年後ゆるさされて帰京しました。道安は秀吉の茶頭に復帰しますが、秀吉が没したことで堺へ退きます。これに対して京都に留まった少庵はその子宗旦とともに千家の再興にあたりました。

宗旦は父少庵と同様に大名家からの招請を拒否し、本法寺(上京区小川通寺之内上る本法寺前町)の門前に簡素な草庵をかまえ、清貧に甘んじながら、利休以来のわび茶の道統の護持とその深化につとめていました。

一方で彼は大名家の庇護がなくては道統の維持さえ困難な時勢を洞察して、家督をゆずった三男江岑宗左を紀州徳川家に、ついで四男仙叟宗室を加賀前田家に、次男一翁宗守を讃岐松平家にそれぞれ茶頭として仕えさせます。ここに表千家(不審庵)・裏千家(今日庵)・武者小路千家(官休庵)の世にいう三千家の原型が成立し、宝暦・明和(一七五一〜七二)のころから利休流茶道の家元として栄えるようになります。なお、下京の本願寺と関わりが深く、利休と同門の藪内家を下流と呼ぶのに対して、三千家を上流と呼んでいます。



裏千家今日庵

この後、三千家流以外にも遠州流・石州流などの諸流派が競い起り、茶湯は武家・公家・僧侶の社会からあふれて京都・大坂・江戸をはじめ地方都市の富商や豪商らの間にまで普及するようになりました。

歩く／見る

■日本最古の茶園 右京区梅ヶ畑梅尾町(高山寺内)

『喫茶養生記』の著者で臨済宗開祖の明庵(栄西)一四一〜一二一五)は宋から抹茶法を請来しました。栄西から茶種を与えられた高山寺開山明恵高弁(一二七三〜一二三三)が、梅尾の地に植えたところ、地味がよく優れた茶がとれるようになったといわれています。

以来当地の茶は本茶と呼び、他所産の非茶と区別され、鎌倉・室町時代には毎年禁裏と將軍家に献上するのを慣例としました。現在、その茶園跡を示す石標が建てられています。

■建仁寺の茶礼

東山区大和大路通四条下る四丁目小松町(建仁寺内方丈) 毎年四月二十日の開山(栄西)降誕会に行われる建仁寺の茶会は、四つ頭茶会とも呼ばれ、独特の方法で点茶を行います。



建仁寺の茶礼 (右)浄瓶から茶碗へ湯を注いでいる。(左)茶笥で点茶をしている。

まず、方丈(重要文化財)に集まった会衆に「供給」の僧から抹茶が入った台付きの天目茶碗と菓子(配られます。続いて、浄瓶(注ぎ口に茶笥がはめてある)を左手に持った供給の僧が会衆の前に立ち、右手で茶笥を取り、会衆が差し出した茶碗に湯を注ぎ、右手の茶笥で点茶します。この禅院の茶礼は今日見られる茶会の古い形態を具体的に知る上で貴重な行事です。

■大黒庵武野紹鷗邸跡 中京区室町通四条上る東側

武野紹鷗（一五〇二〜一五五五）は、室町後期の茶人で、大黒庵と号し、堺の有力町衆の一人でした。二十四歳で上京し四条室町に居を構え、三条西実隆（一四五五〜一五三七）に古典を学び、茶湯は村田珠光の弟子である十四屋宗悟から手ほどきを受け、四畳半の侘び茶をさらに簡素化し小座敷などを創作し、草庵茶湯の法度をつくった茶人です。

その邸宅跡には石標が建っており、近くには珠光や紹鷗が茶をたてるのに利用した菊水井（祇園祭菊水鉢の名前の由来）の跡があります。

■北野大茶湯跡 上京区馬喰町（北野天満宮境内）

天正十五（一五八七）年十月一日、九州平定と聚楽第造営を記念して豊臣秀吉主催の大茶湯が北野で催されました。

大茶湯の当日、北野天満宮の拝殿に持ち込まれた茶席には秀吉蒐集の名物が飾られ、参加者の拝見を許す一方、拝殿の外では秀吉・利休・津田宗及・今井宗久が茶席を設けて参加者に茶を供しました。この四茶席で用いられた茶道具も秀吉が集めたもので、茶事は正午で切り上げられましたが、参加者は貴賤を問わず八百三人にのぼったといわれています。

現在、北野天満宮の参道には、その茶会会場の跡地を示す石標が立てられています。

■三千家の茶室

千利休切腹後、継子少庵が豊臣秀吉から千家復興を許され、表千家の代表的な茶室となる不審庵（上京区小川通寺之内上ル東側）を復興しました。その後、息子の宗旦に譲られ、正保三（一六四六）年、宗旦の三男江岑宗左（一六一三〜七二）が



表千家不審庵



武者小路千家官休庵

の代表的な茶室としました。

次男一翁宗守（二五九三〜一六七五）が建てた官休庵（上京区武者小路通小川東入北側）は、武者小路千家の代表的な茶室であり、庵名は宗守が讃岐高松藩を辞して造営したことに由来します。

■茶道資料館

上京区堀川通寺之内上る（裏千家センター内）

財団法人今日庵が設置する茶道美術品展示施設で、今日庵文庫を併設して、昭和五十四年に開館しました。茶道関係の資料の蒐集保管と調査研究、さらに茶道の歴史や道具の展示を行っています。

なお、年間に企画展が四回行われ、茶席もあり抹茶とお菓子の接待を受けることが出来ます。

■楽美術館 上京区油小路通中立売上る

楽焼窯元の楽家に伝来する陶芸品の展示施設で、昭和五十三年、公益財団法人として設立されました。初代長次郎以来四百年にわたる歴代の楽陶工芸品を中心に、茶道工芸品・関係古文書などを収蔵しています。

この庵を継ぎます。

不審庵を譲った宗旦は北隣に今日庵を建てて隠居しており、この茶室は四男仙叟宗室（一六二二〜九七）が継ぎ、裏千家